

カリキュラムの変遷と現状

医学科西新橋校

教学委員長 竹 森 重

1. 教学委員会

前任宇都宮一典医学科教学委員長の退任に伴い竹森 重が医学科教学委員長として就任し、医学科教学委員会の新体制がスタートした。医学科教学委員会は国領校選出委員2名および西新橋校選出委員16名の18名で構成し、毎月2回定例で開催された。委員の役割分担は以下の通りである。

竹森 重(教学委員長)、横尾 隆(副教学委員長)、野呂幾久子(副教学委員長、1学年担当)、繁田雅弘(学生部長)、嘉糠洋陸(副学生部長、3学年担当)、横井勝弥(副学生部長)、南沢 享(国際交流副センター長、2学年担当)、岡本愛光(学生保健指導委員長、4学年担当)、武田 聡(5学年担当)、大木隆生(6学年担当)、岡部正隆(カリキュラム委員長)、宮田久嗣(学生支援委員長)、靱山俊彦(教育資源委員長)、中村真理子(教育プログラム評価委員長、教員評価検討委員長、IR部門)、石橋由朗(試験委員長)、常喜達裕(臨床実習教育委員長)、鈴木英明(東京都地域枠担当)、柳澤裕之(副学長)。

2. 2019年度医学科の進級、2019年度卒業者

2019年度各学年の学生数および進級、2019年度卒業は以下のとおりである。

1年：113名 進級：109名 留年：4名
2年：111名 進級：106名 留年：3名
退学：2名
3年：112名 進級：111名 留年：1名
4年：108名 進級：108名
5年：118名 進級：118名
6年：109名 卒業：109名
合計：671名

3. カリキュラムの改編等について

ディプロマポリシーに定めた卒業時までまでに修得しておくべき知識や技能を身に付けさせるため、アウトカム基盤型教育検討WGを設置し、1～2年生、3～4年生に分けてカリキュラム見直しを図った。また、冬季より新型コロナウイルス感染症流行に

伴い学生の安全性を考慮に入れ、2020年2月末より各学年の実習に関して時差通学を実施し、2020年3月上旬には、国内外の医療関係機関での実習・見学を取りやめた。感染症流行の長期化を懸念し、次年度の授業準備として、遠隔授業の体制構築を進めた。

4. 医学科学生教学検討会議

開催日：2019年7月11日(木)、12月17日(火)
例年同様に年2回開催し、教学委員と学生会委員との間で授業、学生生活および施設改善等について意見交換を行った。今年度より懇談会から会議として位置づけ、名称を変更した。また、学生会委員を教学委員同様に本会議の委員とした。

5. Faculty Development「医学教育者のためのワークショップ」

2019年4月以降の開催および参加者数は以下の通りである。

- ・スタートアップ研修 Faculty Development
日 時：2019年4月16日(火)
場 所：西新橋校
テーマ：スタートアップ研修
修了受領者(27名、実行委員12名)
- ・Post-CC OSCE 評価者トレーニング Faculty Development
日 時：2019年7月20日(土)
場 所：西新橋校
テーマ：Post-CC OSCE 評価者トレーニング
修了受領者(63名、実行委員27名)
- ・OSCE 評価者トレーニング Faculty Development
日 時：2019年8月3日(土)
場 所：西新橋校
テーマ：共用試験OSCE 評価者トレーニング
修了受領者(54名、実行委員11名)
- ・臨床実習前医療面接実習教員養成 Faculty Development
日 時：2019年11月9日(土)

場 所：西新橋校

テーマ：臨床実習前医療面接実習教員養成
修了受領者（18名，実行委員5名）

- ・初年次教育に関するワークショップ Faculty Development

日 時：2019年11月30日（土）

場 所：国領校

テーマ：初年次教育に関するワークショップ
修了受領者（23名，実行委員9名）

- ・臨床実習現場におけるEBM指導のための教員教養 Faculty Development

日 時：2020年1月18日（土）

場 所：西新橋校

テーマ：臨床実習現場におけるEBMの指導
修了受領者（14名，実行委員2名）

6. 医師国家試験

試験日(第114回)：2020年2月8日(土)～9日(日)

合格者発表日：2020年3月16日(月)

受験者数：112人 合格者：106人 合格率94.6%
(全国平均92.1%) (全国33位，私立14位)

新卒受験者：109人 合格者：104人 合格率95.4%
(全国平均94.9%)

既卒受験者：3人 合格者：2人

7. 退任記念講義，退任記念式典，退任記念パーティー

開催日時：2020年1月31日(金)14時

開催場所：大学1号館3階講堂

演者及び演題：

- ・矢永勝彦教授（外科学講座（消化器外科））
「Academic Surgeonの育成を目指して」

- ・丸毛啓史教授（整形外科学講座）「大学生活の道のり－寒翁が馬（その2）」

各分野で活躍された2名の教授の経歴やこれまでの思い出，研究への熱意など，とても有意義な講義に学生及び教職員一同が大変感銘を受けた。次いで竹森 重教学委員長から同じく定年退任される8名，堀 誠治教授（感染制御科），谷 諭教授（脳神経外科学講座），岡 尚省教授（内科学講座（神経内科）），伊介昭弘教授（歯科），川村哲也教授（大学直属），清田 浩教授（泌尿器科学講座），新美茂樹教授（産婦人科学講座），小原 平教授（英語研究室），の略歴が紹介され，松藤千弥学長より長年の大学への貢献に謝辞が述べられ記念品を贈呈した。また，同窓会，医学科保護者会，医学科学学生会より記念品の贈呈があった。

退任記念講義終了後，退任される教授を囲んで退任記念パーティーを「東京プリンホテル プロビデンスホール」にて開催した。会場には，教職員，同窓，学生など250名を超える参加があり，盛大なうちに会は終了した。

8. 医学科オープン・キャンパス

開催日：2019年8月14日（水），15日（木）

開催場所：2号館講堂

当日は学長挨拶，本学の医学教育，卒業生のキャリアパス，本学の入試が求めるもの，学生代表による入試準備・大学生活・大学での勉強，その後，大学1号館教育施設の見学と個別相談会の他，パネル展示や学生クラブ紹介ビデオの放映，模擬講義，英語による医療面接見学，入試相談会を開催した。

9. 学祖の墓参ならびに学長，教学委員と学生の懇親会

2019年10月12日（土）に予定していた学祖の墓参は，台風19号の影響により中止となった。しかし，今年度は，学祖誕生170周年の節目の年であるため，規模を縮小して2019年11月16日（土）に墓参を実施した。墓参後，学祖を偲んで千代田区一ツ橋の如水會館で懇親会を開催した。

10. 臨床実習の共用試験

医学科4年生（108名）を対象に2019年8月19日（月）に西新橋校大学1号館4階講堂にてCBTを実施した。また，2019年8月24日（土）に西新橋校大学1号館8階演習室および7階実習室にてOSCEを実施した。結果，全員合格しStudent Doctorsとして認定された。

医学科6年生（109名）を対象に2019年9月20日（金），21日（土）に西新橋校大学1号館8階演習室および7階実習室にて診療参加型臨床実習の終了要件となるPost-CC OSCEを実施した。今年度は，全国トライアル参画最後の年となり，機構課題3課題を含む全12課題の試験を滞りなく実施し，次年度の共用試験を向かえる体制が整備された。なお，医学科6年生については，全員合格した。

11. 4大学学生教育交流会

本学と昭和大学，東邦大学，東京医科大学の4校が持ち回りで年2回の開催が続けられている。今年度は，臨床実習の拡充を中心にカリキュラム全般に関すること，入学者選抜，Post-CC OSCE，高大接続，学生のアンプロフェッショナルな行動，学生支

援（留年時の対応等）についての意見交換を行った。
今後も継続して本交流会を開催する予定である。
2019年度の開催日および当番校は以下の通りである。

第42回：2019年6月5日（水）東京医科大学

第43回：2019年11月28日（木）東邦大学

医学科国領校

副教学委員長 野 呂 幾久子

1. 教学

1) 6年一貫教育に基づく新カリキュラムが開始されてから18年目を迎え、国領校での1年間の教育体制は定着している。

国領校教員が担当する主なコースは、1年次：総合教育、生命基礎科学、外国語Ⅰ、医学総論Ⅰ、医療情報EBMⅠ、2年次：外国語Ⅱ、医療情報EBMⅡ、3年次：外国語Ⅲ、4年次：外国語Ⅳの4学年9コースである。コース総合教育、外国語Ⅰ～Ⅳはスモールグループによる演習科目を中心に、その他のコースは実習、演習、講義を有機的に連携させた科目として実施した。

2) 学生生活アドバイザー制度は今年度も継続され、国領校教員・西新橋校教員・第三病院教員による担当学生との面談（会食、他）が行われた。近年、第三病院教員は人数を絞り、確実に学生との往来が可能な教員のみとしたため、国領校教員1名が担当する学生数が増え、日程を組むのが困難になっている。

3) 学生の健康管理として、1年生113名を対象に、学生健康診断・T-spot検査（受診率100%）、小児感染症予防対策ならびにB型肝炎予防対策として1年生全員を対象に抗体検査を実施し、低抗体価者に対してワクチン接種を実施した。また、自宅接種者等を除く全員に対しインフルエンザの予防接種を実施した。

4) 副学生部長と1年生学生会委員との懇談会を前期は2019年6月27日（木）、後期は2020年1月7日（火）に開催した。また、医学科1年生と看護学科1年生の学生会委員の顔合わせを兼ねた懇談会を2019年7月2日（火）に開催した。

5) 例年行っている国領校教員と1年生との会食（昼食会、教員1名に対し、学生5名～6名）は、学生1名当たり前期・後期に各1回実施した。

2. 入学式およびオリエンテーション

1) 2019年度入学式は4月11日（木）に挙行され、109名（東京都地域枠4名）の新入生を迎え1年生113名が在籍した。これらのうち109名の学生が進級した（4名は留年）。

新入生オリエンテーション（学内）が2019年4

月12日（金）、本年度の学生会クラブ紹介は、2019年4月15日（月）～25日（木）の9日間授業終了後に実施された。

2) 2005年度から新入生を対象に実施している、防災（狛江消防署）・防犯（渉外室）の講演、ならびに2018年度より実施を開始した、本学顧問弁護士による特別講演「医師・医学生・看護師・看護学生の犯罪行為とその責任」を開催した。

3) 2010年度より実施の救急医学講座・救急部スタッフによる救急蘇生実習を昨年度同様に看護学科新入生と共修で実施した。

4) 医学科・看護学科新入生のためのスタートアップ研修は、昨年と同様にユニット「医療総論演習」4コマ分とし、西新橋キャンパスにて1日で開催した。

3. 教学関係委員会

教学委員会：野呂幾久子（副委員長）、横井勝弥（副学生部長）、鈴木英明

カリキュラム委員会：小澤隆一、高田耕司、藤井哲郎、アラン・M・ハウク、鈴木英明

学生部委員会：横井勝弥（副委員長）、小澤隆一（東医体理事）、鈴木克己、平塚理恵、鈴木英明

学生相談室委員会：横井勝弥

学生保健指導委員会：竹田 宏（副委員長）、加藤 順一郎（1年担当：内科）、館野 歩（1年担当：精神科）

教育研究助成委員会：高田耕司

教育施設委員会：植田 毅

教育プログラム評価委員会：岡野 孝

図書館国領分館運営委員会：三崎和志（分館長）、鈴木克己、平塚理恵、加園克己

国領キャンパス防火防災委員：植田 毅（副委員長）、小宮成義、長谷川泰子、鈴木英明

教授会議出席者：岡野 孝、鈴木克己、横井勝弥

4. 教員の異動

新任：

アラン・M・ハウク（教授、外国語教室英語研究室）（2019年4月1日付）

ディビット・チェバスコ, 平井 徹, (講師, 非常勤: 外国語) (2019年4月1日付)

和田美月, 河田尚暉, 松森航平, 五十嵐菜々子, 梶野祐人 (助手, 非常勤: 生命基礎科学実習) (2019年4月1日付)

加藤万吏乃 (講師, 非常勤: 総合教育) (2019年12月1日付)

退任:

小原 平 (教授, 外国語教室英語研究室) (2020年3月31日付)

磯崎三喜年, 木下未果子, 泉 京鹿, 染谷悦男 (講師, 非常勤: 総合教育・外国語) (2020年3月31日付)

川崎洸司, 小俣和輝, 河田尚暉, 藤谷 万, 信岡慶一 (助手, 非常勤: 生命基礎科学実習) (2020年3月31日付)

5. Faculty Development

2019年度は以下のとおり開催した。

- ・2019年度医学教育者のためのワークショップ「初年次教育に関するワークショップ」

日 時: 2019年11月30日(土)

場 所: 国領校220講義室

テーマ: 初年次教育の課題と展望, および西新橋の教育との連携

初年次教育については, その重要性は共有されているものの, 実際に国領校でどのような教育が行われてきたのか, 今後どのような教育を目指すのかについては, 国領校教員の間でも情報が共有されているとは言い難く, 今回のFaculty Developmentでは, まず各教室の担当者から教育の課題と展望について報告し, 初年次教育についての教員間の情報共有を図り, それを踏まえて, 国領校と西新橋校の教育連携の現状と今後の可能性について意見交換を行い, 本学の6年間の教育の中で, 専門教育と有意な連携を持つ初年次教育のあり方について協議した。

6. その他

1) 行事として, 医学科保護者会春季総会(2019年6月1日(土))が国領キャンパスで開催された。

2) 災害対策として例年1年生(医学科・看護学科)を対象に実施している大規模災害を想定した避難訓練(2019年5月24日(金))を実施した。また, 災害対策備蓄品のうち非常用飲料水の更新購入を行った。

3) 学生の課外活動時の熱中症対策として, 前年度に引き続き熱中症に関する注意喚起ならびに熱中症指数計による計測を行わせた。(2019年6~9月末)

2019年度カリキュラムの概要

1. コース名：医学総論Ⅰ～Ⅱ
2. コース責任者：中村真理子

3. コースの教育活動の概要：コース医学総論Ⅰは、必修ユニットとして「新入生オリエンテーション」、「医学総論Ⅰ演習」、「医療総論演習」、「Early clinical exposureⅠ」、「Early clinical exposureⅡ」、「病院見学実習」、「救急蘇生実習」、「前臨床実習Ⅰ：福祉体験実習」、自由選択ユニットとして「プライマリケア・選択学外臨床実習」、「医学研究Ⅰ」から構成されている。医療者としての動機づけと基本的マナーと態度の涵養のために、入学後早期に「新入生オリエンテーション」、「医療総論演習」の中で「スタートアップ研修」、「救急蘇生実習」を医学科・看護学科共修で実施し、さらに「Early clinical exposureⅠ」および「病院見学実習」を実施した。「医学総論Ⅰ演習」前期では、病気や一人ひとりの患者に多様性があること、EBMとNBMの考え方について学ぶ機会を提供し、さらに実践的な演習として血圧・心拍数の測定と手洗い実習を組み込んで、その結果の解釈と説明をする機会を設けた。「医学総論Ⅰ演習」後期では、医学研究への動機付けを図るために、医学の基礎・応用研究について学ぶ機会を提供した。また、実際に一般市民であるあけぼの会の方の血圧を測定して説明することを通じて、医療コミュニケーションやプロフェッショナルリズムについて体験して振り返ることを目指した。「医療総論演習」では、医療倫理、コミュニケーション、言語技術、グループダイナミクス、医療安全、チーム医療などをテーマとして、協同学修の方略を用いて、医学科と看護学科との共修授業を実施した。一般市民との対話では医療コミュニケーションの基礎を学べるようにした。全人的医療、コミュニケーションおよびチームワーキングの重要性を体験的に学修するために、地域の授産・更生施設において「福祉体験実習」を行った。学年末に「Early clinical exposureⅡ」を医学総論の総括として実施した。

コース医学総論Ⅱは、必修ユニットとして「学年オリエンテーション」、「医学総論Ⅱ演習」、「学年研修Ⅱ」、「前臨床実習Ⅱ：重症心身障害児療育体験実習、地域子育て支援体験実習」から構成されている。「医学総論Ⅱ演習」では、従来からの自己評価の心理学、情報検索演習、薬害問題（薬害肝炎、HIV発見の歴史）、薬物乱用防止のためのシミュレーションに加え、医療コミュニケーション教育の継続性を

考えて、あけぼの会の方の血圧を測定する演習を新たに組み入れた。「自己評価の心理学」では、自己の性格傾向とその陥りやすい行動パターンについての認識を深め、今後の患者との接し方についても考察できる様にした。成人を対象とした1年次の福祉体験実習に対して、「前臨床実習Ⅱ」では時間軸に沿った人間理解を深めるために、地域子育て支援体験実習及び重症心身障害児療育体験実習を行った。大学附属病院以外の地域におけるプライマリケア、病診連携、救急医療、在宅医療、他職種連携のチーム医療及び疾病予防・健康維持推進活動などを体験的に学ぶために「プライマリケア・選択学外臨床実習」を、研究を志向する学生のために「医学研究Ⅱ」を選択ユニットとして設けている。

4. コースの教育活動の点検・評価：スタートアップ研修では、学生間および学生と教員間のコミュニケーションを促進するという目的は、一定の成果をあげることができたと考えられる。「Early clinical exposure」は1年次のユニット中では一貫して学生から高い評価を受けている。「医学総論Ⅰ演習」では、血圧や脈拍を測定するという単なる技能演習ではなく、多様性の理解や患者への配慮やコミュニケーションなどを含め、生命現象への理解を臨床教育との関連において深めることを目的とし、6年間のカリキュラムの中で初年次としての成果を上げていると評価できる。先端的な医学研究について情報提供することにより、医学研究への動機付けの成果をあげた。「医療総論演習」は看護学科との共修で実施しており、将来、医療現場で異なる職種に就く学生間での認識や考え方の違いを相互に理解する機会という点で特色がある。自ら考えて問いを発することを目的に、本演習ではグループでの協同学習の手法を取り入れ、グループダイナミクスについて考察する機会も設け、グループで行動することの是非について認識できたと考えられる。「福祉体験実習」は臨床実習へ向けての第一歩として、最初に外部施設において学生評価を受ける機会でもあり、学生の問題点を抽出してフィードバックを得る機会として重要と考えられる。2年次実施の学外実習（前臨床実習Ⅱ）は、子供とその家族が対象となるため、学生は困難な場面にも遭遇するが、1年次との比較において、個々の学生の精神的成長を評価することができた。「自己評価の心理学」では、自己の性格傾向のスペクトラムについてコンピュータによる質

問で即時のフィードバックを可能とし、自己認知の気づきとしてユニークである。医療の現場における倫理的・社会的問題として薬害問題を取り上げ、患者の困難と医師としての適切な行動について認識できたと考えられる。あけぼの会の方をお迎えして血圧を測定し、適切な態度で接することとエビデンスを基にした説明ができることについて、一定の成果をあげた。医学総論では高い言語技術力を求めており、総括的評価としてのレポートでは、必要とする信頼度の高い情報を収集し、それを基に論理的な文章を構築できるかで評価した。教員評価の後に自身での振り返りの時間を設け、内省する機会を得てレポート作成能力向上につながったことを確認している。

1. コース名：医学総論Ⅲ～Ⅵ

2. コース責任者：福島 統

3. コースの教育活動の概要：コース医学総論Ⅲでは、「学年オリエンテーション」「医学総論Ⅲ演習」, 「学年研修Ⅲ」, 「在宅ケア実習」, 「病院業務実習」, 「高齢者医療体験実習」, コース医学総論Ⅳでは、「学年オリエンテーション」, 「医学総論Ⅳ演習」, 「学年研修Ⅳ」, 医学総論Ⅴでは、「医学総論Ⅴ演習」, 「学年研修Ⅴ」, 「家庭医実習」, コース医学総論Ⅵでは、「医師国家試験ガイダンス」が必修ユニットとして組まれている。学年を超えて「CPC」が3年次から6年次に選択必修として、1年次から6年次で「プライマリケア・選択学外臨床実習」, 「産業医実習」および「医学研究」を自由選択ユニットとして開講している。看護学科との共修授業として、1年次の医療総論演習と5年次の医療倫理演習がある。医学総論演習は1年次から5年次まで継続的に開講され、「医学総論Ⅲ演習」では、プロフェッショナルリズム、患者安全、地域医療、医学生としてのマナー、キャリアガイダンス、難治性疾患、健康の社会的決定要因、あけぼの会の支援を受けての病気の説明などをテーマとし、医療の様々な問題について学修する中で、医師の社会的役割について自分なりに課題を見つけて努力することを目標とした。「医学総論Ⅳ演習」では、医療面接、接遇など臨床実習に進むために必要な医療コミュニケーションをメインに取り上げた。「医学総論Ⅴ演習」では、臨床実習における感染防御、臨床実習オリエンテーション、白衣授与式、全科臨床実習中間報告会、看護学科との医療倫理の共修演習、がん患者さんをお呼びしての difficult news telling、アドバンスケアプランニング、医療保険制度、東京都地域医療、などをテーマとして必修演習とし

て実施された。なお、コース臨床医学Ⅲ「オリエンテーション」では、医療安全に関する演習をコース医学総論Ⅴとコース間連携を行った。選択ユニットとして、「プライマリケア・選択学外臨床実習」, 「産業医実習」, 「医学研究Ⅲ～Ⅵ」を開講した。「プライマリケア・選択学外臨床実習」は様々な医療ニーズを学生が体験できるようにするために、学生が希望する臨床現場に1日単位で学修できるユニットである。学生が希望する派遣先も多様になっており、海外での臨床体験を行う者もいる。「産業医実習」も参加者が増加傾向にあり、正規のカリキュラムではカバーしきれない臨床体験を得る場になっている。2015年度から新設ユニット「医学研究」を設けた。これは学生時代に論文発表や学会発表を行った場合、それを成果主義に基づき単位化し、学生が本学の基礎系大学院に進学する際には、単位互換可能な学修として規定する仕組みになっている。

4. コースの教育活動の点検・評価：2015年度の4年生から臨床系の新カリキュラムがスタートしたため、コース医学総論Ⅳ、Ⅴ、Ⅵを学年進行に沿って改編し、2017年度に医学総論のコースカリキュラムが完成した。2015年度から3年次に学外実習「高齢者医療体験実習」を新設し、5年を経過して学外実習として安定してきた。この実習は実習先確保に、厚生労働省医政局医事課長及び老健局老人保健課介護保険データ分析室長（ともに医系技官）の協力を得た。行政との連携によるカリキュラム実施となったことは、今後のカリキュラム改善の一つの手法を提供したのとして自己評価している。

あけぼの会の支援を受けて「市民参加の授業」を少しずつ拡大している。また、患者参加の授業も視覚障害者、腎移植患者、薬害肝炎患者、多発性硬化症患者の支援のもと続けている。「市民参加の医学教育」という概念での授業設計は重要なカリキュラムの視点であり、今後、どのように拡充していくかコース内での検討を行っている。特に臨床実習に出ている高学年の学生は、病棟文化の中で医師を中心に学ぶため、患者側の視点が薄くなることが知られている。高学年に対して「市民参加の授業」を行う可能性を検討する必要がある。

「学年オリエンテーション」は、2年次前期と後期、3年次前期と後期、そして4年次前期に行っている。「学年オリエンテーション」ではその時の重要な話題を取り上げ、学生に医学生としての責任を考えさせる場となっているが、学生の飲酒問題をはじめとした学生生活や学修活動上での困難などについて、学生同士が話し合う機会を増やす必要を感じていた

ため、今年度から各学年に「学年研修」が導入された。学生が主体となってプログラムの作成から実施までが行われ、学生同士の啓発がなされていた。

コース医学総論は6年間にわたってカリキュラムが組まれているので、各学年での他の開講ユニットとの水平的連携、さらに学年を超えた垂直的連携をさらに進めていくことが望まれる。本学が定めている「卒業時コンピテンス・コンピテンシー」ならびにディプロマポリシーに沿った評価方法についてもさらなる検討が必要である。2016年3月に新しいモデル・コア・カリキュラムが発表された。行動科学がC-5「人の行動と心理」、また医療社会科学としてB-4「医療に関連のある社会科学領域」として新設された。医療社会学のカリキュラムを充実させていく必要がある。臨床の場に出た学生が、行動科学や医療社会学の内容について症例をベースに学び、その学修成果を学生同士で共有していく場を作っていく必要がある。また、国領の教養系教員が高学年の学生に対して、医療にかかわる人文社会科学の教育を提供するカリキュラムを考えていく必要がある。

1. コース名：総合教育

2. コース責任者：小澤隆一

3. コースの教育活動の概要：コース総合教育の一般的意義は、専門知識・理論およびその応用・技術に対する社会的意味の認知と人間的価値に基づく判断・評価を可能とする実質合理性の涵養にある。総合教育は「数学」、「日本語表現法」、「人文科学」、「社会科学」、「教養ゼミ」の5ユニットによって構成されている。

「数学」2単位必修：線形代数、微分積分

「日本語表現法」2単位必修

「人文科学」2単位選択必修：哲学、倫理学、日本史、西欧史、欧米文学、心理学、比較文化学、教育学、ヨーロッパ文化、文化人類学

「社会科学」2単位選択必修：政治学、法学、経済学、社会学、社会保障学、社会政策学、現代社会論、国際関係論、環境社会論、共生社会論

「教養ゼミ」1単位選択：平和学入門、初等整数論、量子現象入門、有機合成化学入門、グローバルヘルス&リーダーシップ、音楽と思想、海産生物の臨海実習、生命科学研究への招待：生命を観ること探ること、Mathematicaを用いた機械学習(Deep Learning)入門、R言語を用いた単一細胞トランスクリプトーム解析

4. コースの教育活動の点検・評価：本来教育評

価は教育内容に即して行われるべきところ、本コースおよびユニットは性格の異なる学問を基礎として構成されていること、またユニット「人文科学」および「社会科学」は多くの非常勤講師によって担われるをえないことから、一律の点検・評価は困難である。とはいえ、学生による授業アンケートでの評価はおおむね良好である。今後とも、学生の関心、理解度に応じて一般目標に適合した教育効果を上げるべく、教育方法や教育システムの改善を図ることとしたい。

1. コース名：外国語Ⅰ

2. コース責任者：藤井哲郎

3. コースの教育活動の概要：コース外国語Ⅰの一般的な活動意義は、将来の医療及び研究活動に必須とされる言語運用能力の向上と、自律的な学習習慣の養成、自分と異なる文化背景及び価値観を持つ人々を理解しようと努める教養ある態度の滋養である。コース外国語Ⅰは、「一般英語Ⅰ」と「初修外国語」の2ユニットで構成され、それぞれ4単位の必修科目である。「一般英語Ⅰ」は英語熟達度別のクラス編成をし、日本人講師と英語を母語とする講師の双方によって演習を行ってきた。英語を通して、他者と効果的に意思疎通を図る技能、そして自律した学習方略を身につけることを眼目としている。「初修外国語」はドイツ語、フランス語、中国語のいずれかを選択させた上で週に2クラス、演習を行う。それぞれの言語の基礎構造、語彙、発音の習得はもとより、国際的文化的視野を築かせ、知性を陶冶し、学問世界への道筋を切り開くことも目標にしている。

4. コースの教育活動の点検・評価：「一般英語Ⅰ」は、英語コミュニケーション4技能の総合的な向上を目指しているが、特に早い時期から英語の音声聞き取れる能力の土台を築き、教室外でも英語を聞く事前学習の習慣を身につけさせるために、TOEFLの語彙とキーセンテンスを読み上げたりリスニング教材を作成し、聞き取り演習を実施した。さらにTOEFLリーディングの小テストと、TOEFL語彙を援用したディクテーションと英作文演習、さらにTOEICのPart2形式で医療関連のリスニングクイズにも全てのクラスで取り組んだ。また英語への学習意欲向上の試みとして健康関連の英語を扱った教科書やITC教材を採用し、全員が英語でのコミュニケーションを学んだ。これらの結果として「一般英語Ⅰ」の学年末のTOEFL ITP試験では過半数の学生が満点を取得した。また4月に比べて

TOEFL 式のライティング考査でも学生はより多くの英文をタイプ打ちで書けるようになった。これらの点を考慮すると、リスニング技能を土台にした、読解力、発話力、作文力の演習には高い教育効果があったと評価できる。

「初修外国語」では、それぞれの言語により学習の重点は多少異なる。ドイツ語・フランス語の文法事項に関しては、おおむね共通の達成目標を設定しやすく、実際に1年間の進捗と達成度はほぼ同じであるといえる。また最終的に比較的長い文章を、辞書を使いながら独力で読み解くことができるようになるという意味では、中国語についても、その道筋は異なるとは言え同様の目標に到達したと言える。ただし、中語語に関しては文法項目が印欧語族に比べて少ないがゆえに、より発展的に音声を識別することにも力を注いだ。しかし、履修者の増加により練習密度が保てなくなってきている。そこで今年度も、履修者数の制限を実施した。中国語に関しては現在1クラスでの開講であるが、次年度よりドイツ語・フランス語と同様に2クラスでの開講を準備している。フランス語のクラスにおいても、中国語同様に文法と並んで音声訓練を重視した授業を行った。近年初年時の文法項目を少なくする傾向にあるが、本ユニットではかつて2年間開設されていた時と同じように、すべての文法項目を網羅するように努めた。基本的文法の習得は、独力での読解の道筋をつけるためには欠かせないと考えるからである。いずれの言語を選択しても、日本語とも英語とも異なる言語の学習は、その言語の背景となる各国の文化や社会にもおのずと関心を抱くようになり、学生の複眼的思考力と倫理的価値観の滋養に寄与している。総じて両ユニットは、教える者と教わる者との相互理解に基づいてきめ細かい指導を行っているが、それは多数を占める非常勤教員の熱意と、教員間の信頼によって成り立っている。教員同士で互いを尊重しながらコミュニケーションを図る模範を学生に示すことはコース運営上の基盤となっている。

1. コース名：外国語Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

2. コース責任者：小原 平

3. コースの教育活動の概要：コース外国語Ⅱ、Ⅲの一般的な意義は、将来の医学研究に役立つ語学力と、より深い異文化理解に向けた態度の育成にある。

コース外国語Ⅱは3単位の必修科目であり、「一般英語Ⅱ」のユニットによって構成され、演習場所も、国領校から西新橋校へ移動する。初年度に履修

したコース外国語Ⅰのユニット「一般英語Ⅰ」の目標リストに加えて、医学という専門的な分野における様々な状況に対応した英語を使用する際に、基礎となる知識と技能を養うことを目指している。

コース外国語Ⅲは2単位の必修科目であり、「医学実用英語Ⅰ」と「医学英語専門文献抄読Ⅰ」の2つのユニットによって構成される。前者は英語研究室の教員が、後者は医学の基礎系、臨床系の教員が担当し、より専門的な分野で扱う英語の知識、技能の習得を目指している。

コース外国語Ⅳは1単位の必修科目であり、「医学実用英語Ⅱ」のユニットからなる。医学英語の専門用語を半期で習得することを目指している。

4. コースの教育活動の点検・評価：コース外国語Ⅱのユニット「一般英語Ⅱ」においては、前期は、医学英語入門となる教材を用いて、診療英会話における基本的な表現と、医学専門用語を学習するための基本的な知識の習得をめざした。後期は、選択制にして、医学的な内容のトピックを教材として取り入れ、学生の興味や意欲がそこなわれないようにした。またこの演習では、英語能力の格段に優れた学生を対象に、特別クラスによる医学英語演習も行った。

コース外国語Ⅲのユニット「医学実用英語Ⅰ」においては、語学の専門教員による必修選択制の半期の演習を実施した。内容は診療英会話、英語プレゼンテーション演習から、将来の留学準備のためのTOEFL、IELTS等の演習に及ぶ、バラエティに富んだ内容になるように工夫した。2007年度より、2年の後期から実施するようにして、学生の望むテーマ選択の幅を増やしている。またこの演習では英語能力の格段に優れた学生を対象に特別クラスによる医学英語演習も行っている。「医学英語専門文献抄読演習Ⅰ」においては、基礎、臨床の専門教員を講師に、半期の少人数制の読書会形式の演習を実施している。各教員あたりの学生数は2～4名で、密度の高い演習が小部屋で行えるようになっている。最近では、臨床の教員もスタッフの一員として多く加わるようになり、学生の選択の幅も広がってきている。

最後にコース外国語Ⅳでは、半期の専門用語習得のためのクラスを実施している。臨床実習を補完するような演習をめざすということで、多肢選択問題を利用して、専門用語の意味が直感的に分かるようにする訓練を重ねた。それに伴い、演習で使用するハンドアウトや演習問題の内容を、より学生が理解しやすくなるように改良を加えた。

1. コース名：生命基礎科学

2. コース責任者：岡野 孝

3. コースの教育活動の概要：本コースは物理学・化学・生物学の基礎自然科学3分野を統合したコースであり、1年次に履修する。本コースの目的は、生命現象の理解に必要な自然科学的教養の基盤を構築し、医学学習のための準備教育としての役割を果たすことである。「自然科学入門演習」(物理系・化学系・生物系のうち1単位)、「生命の物理学」(2単位)、「生体分子の化学」(2単位)、「細胞の生物学」(2単位)、「生命基礎科学実習」(物理系・化学系・生物系、合計5単位)の5ユニットから構成されており、全12単位を一括して単位認定する。

「自然科学入門演習」は、自然科学3分野の中で、高等学校で選択履修してこなかった科目のためのリメディアル教育としての目的と、自然科学3分野での基礎学力の底上げを目指して開講している。「生命の物理学」・「生体物質の化学」・「細胞の生物学」では、それぞれの分野での専門的基礎知識を体系的に学び、基礎医科学との連携を図っている。また、「生命基礎科学実習」では、自然科学的研究態度、技法の体得や実習報告のまとめ方の学修を目的とし、大きな単位数を設定している。

4. コースの教育活動の点検・評価：授業コマ数は、年度の学事暦に左右されないよう開講調整により固定しており「生命の物理学」25コマ、「生体分子の化学」25コマ、「細胞の生物学」25コマ、「自然科学入門演習」12コマ、「生命基礎科学実習」146時間であった。「自然科学入門演習」では入試における非選択分野を履修することとし、生物分野受講者82名(物理・化学選択者)、物理分野受講者28名(生物・化学選択者)、化学分野受講者1名(物理・生物選択者)であった。「生命基礎科学実習」では、文書作成が苦手な、実験ノート記載の不備や実験レポートの内容の不備・提出締め切り遅れが目立つ学生が増加しているため、引き続き特別に指導を強化している。

1. コース名：医療情報・EBM I～IV

2. コース責任者：柳澤裕之

3. コースの教育活動の概要：本コースは、1年生：医療情報・EBM I、2年生：医療情報・EBM II、3年生：医療情報・EBM III、4年生：医療情報・EBM IVと、4学年にわたり連続して実施される。本コースの目的は、将来、根拠に基づく医療(Evidence-Based Medicine: EBM)を実践できるように、医学統計学と疫学の基本的な知識・スキルを習得す

ることである。この目的のために、1年生から2年生では、コンピュータ・ソフトウェアの使い方と医学統計学の基礎知識、3年生から4年生では、疫学の基礎知識とEBMの進め方について、以下のような演習を行った。

1年生は2ユニットからなり、「情報リテラシー」ユニットは2グループにわけて90分×12回、「コンピュータ演習アドバンス」は90分×12回行った。

2年生は、ユニット「医学統計」として90分×10回行った。

3年生は、ユニット「Evidence-based clinical practice I」として180分×8回行った。

4年生は、ユニット「Evidence-based clinical practice II」として180分×7回行った。

4. コース教育活動の点検・評価：本コースは、EBMに必要な基本的な知識・スキルを1年次から4年次まで段階的に修得し、最終的に、臨床実習の場でEBMを実践できる能力を涵養する内容となっている。レポートや筆記試験により評価した結果、基本的な知識・スキルを習得できていたが、海外の論文を収集・理解する力についてはさらなる向上が望まれる。

1. コース名：基礎医科学 I

2. コース責任者：竹森 重

3. コースの教育活動の概要：自然科学系の準備教育の一部を基礎医学に取り込み、1年次までの教育を活かしながら医学への入門とすることを理念の一つに基礎医科学 I のコースは構築された。しかしコース開設以来、基礎医学の総論としての比重と共に、医学の学び方を身につけるためのコースとしての役割が大きくなってきている。医学知識を知識の断片として収納していくのではなく、医学関連の現象の解釈と予測に活かせる形で定着させながら学びを進める技能が習得されるよう工夫を凝らしている。医学的実例を交えた演習・実習、レポート課題や、その達成度評価を意識した試験などである。引き続きコース基礎医科学 II では臓器別の各論が高密度で教授されるため、コース基礎医科学 II の学習が始まってから医学の学び方を身につけていたのでは多くの学習時間を無駄にしてしまうことになる。

コースは具体的には、生体構造の基本構築を学ぶ「細胞から個体へ」のユニット、細胞の生命活動のもととなる生化学反応の実際と制御を学ぶ「分子から生命へ」のユニット、あらゆるレベルにおいて生命活動が従う自然の摂理を理化学的にとらえる「自

然と生命の理」のユニット，生体の機能単位間の調節を学ぶ「生体調節のしくみ」のユニットの4ユニットで構成されている。

学術への姿勢の変化や，科学的・論理的な理解力・記述力，さらには読解力・聞き取り能力の低下が進行しているのを感じながら，各ユニットが協力して工夫を凝らしている。1年次課程との協働で着実な初年次教育課程を構築することを目指した討議も開始された。

4. コースの教育活動の点検・評価：コース基礎医学Ⅱが始まるまでに医学の学び方を身に付けられない学生は年々増加しており，学生の変化に教員の対応が追いついていない。1年次から2年前期のコース基礎医学Ⅰの履修期間までを通じた実効ある初年次教育システムの検討を，自律して学ぶ姿勢を身に付けさせるという目的を見失わないよう注意しながら急ぐべきである。レポートの提出期限の順守などの基本的学習態度に問題が残る学生も少なくない。2年次以降にこうした基本的問題の解決を先送りにすることのないよう，2年次までの担当教員には教育指導に対する意識変革が求められることになろう。

1. コース名：基礎医学Ⅱ

2. コース責任者：岡部正隆

3. コースの教育活動概要：コース基礎医学Ⅱは2年生後期に実施され，コース基礎医学Ⅰに引き続き基礎医学教育を担うものである。人体を構成する各臓器，器官系，および機能調節系についてその正常機能と肉眼的・組織学的構造を系統的に理解し，臓器間，および器官系間の相互関係を学ぶ。本コースは以下の各ユニットにより構成されており，各ユニット責任者を括弧書きで示した。「基礎医学Ⅱオリエンテーション」(岡部正隆)，「生体と薬物」(榎山俊彦)，「血液・造血系」(橋本尚詞)，「循環器系」(南沢 享)，「呼吸器系」(草刈洋一郎)，「消化器系」(橋本尚詞)，「生殖器系」(岡部正隆)，「感覚器系」(山澤徳志子)，「泌尿器系」(南沢 享)，「内分泌系」(橋本尚詞)，「神経系」(榎山俊彦)，「ヒトの発生」(岡部正隆)，「形態系実習」(岡部正隆)，「機能系実習」(榎山俊彦)。尚，ユニット「呼吸器系」，「神経系」，「形態系実習」の責任者が昨年度より変更となっている。このコースの講義では解剖学，生理学，薬理学および生化学が基本になっているが，これらが有機的に統合されてユニットが構成され，臓器あるいは機能別に学修することが教育目標となっている。評価はコース基礎医学Ⅱ総合試験，

コース基礎医学Ⅱ口頭試験および実習演習評価として行われた。現行カリキュラムではこのコース基礎医学Ⅱの評価から総合試験制度を利用する。コース基礎医学Ⅱ総合試験は900点満点で採点し，MCQ問題(CBT)が配点の50%，論述問題が配点の50%を占め，60%以上の得点で合格とした。コース基礎医学Ⅱ口頭試験では，事前に与えられた課題について口頭発表を中心に口頭試験を行い，60%以上の得点で合格とした。実習演習評価は「形態系実習」，「機能系実習」のそれぞれの得点が配点の40%以上で，かつ，「形態系実習」，「機能系実習」の合計の点数が実習演習評価の合計の60%以上であることを必要とした。

4. コースの教育活動の点検・評価：冊子体としてコース基礎医学Ⅱ学習ガイドを作成し，学生と担当教員に配布した。本年度は総合試験委員会(委員長：草刈洋一郎)と口頭試験委員会(委員長：山口真紀)が改組され，新しい体制の下で試験が行われた。総合試験に関しては毎年問題と解答および解説を公開している。2019年度の総合試験は6日に分けて実施された。昨年度までは論述試験後にCBTを行っていたが，本年度は前半の2日でCBTによるMCQ問題を解き，その後4日で論述問題による記述式試験を行った。学修内容の全体に関して基本的事項を問い，その後領域別に日にちを変えて論述問題を解かせることで，試験期間が気づきの多い復習の時間になるように仕向けた。口頭試験は，昨年度まで行っていた顕微鏡を用いた口頭試験を廃止し，コース基礎医学Ⅱの各ユニットの学修内容の関連の深さで分類した3つの領域毎に口頭試験を実施した。これはユニット間の関連やユニットをまたぐ質疑応答をより行いやすいように工夫したものである。体の機能と形態に関する知識とこれを用いた問題解決能力を測ることを目的とし，事前に設定された3つの領域毎の課題の中から，口頭試験開始後に指定された1つの領域について，学生はパワーポイント1枚で口頭発表を行い，発表内容を中心に質疑応答を行った。学生は2回の口頭試験を行ったが，1回目で成績優秀な学生は2回目の口頭試験は免除とした。新しい口頭試験の方法を各学生に適切な時間をかけて十分に評価することができた。今後は，9月から始まる13のユニットの教育内容とその段階的な進行に関して，時間割を整える必要も指摘されており，コース基礎医学Ⅰにおける学修内容との関連もより意識させるための方策を検討する必要がある。

1. コース名：臨床基礎医学

2. コース責任者：嘉糠洋陸

3. コースの教育活動の概要：コース臨床基礎医学は、通年単位のコースである。試験は前期と後期に分けて行われるが、両方に合格しなければ通年単位の取得を認められない。このコースは解剖学、組織学、生理学、生化学などの人体の正常構造と機能を学ぶ基礎医学と、患者、疾患を学ぶ臨床医学との間に位置しており、疾患に関連する基礎的事項を学習することを目的としている。このため学ぶべき領域が多岐に亘っているのが特徴である。

前期は16のユニットから構成される。講義系が13、実習系が2、演習系が1である。講義系ユニットには「病因病態学総論」、「炎症学」、「腫瘍学」、「代謝障害学」、「ヒトの時間生物学」、「栄養科学」、「創傷学」、「行動科学」、「中毒学」、「放射線基礎医学」、「病態と薬物」、「和漢薬概論」、「免疫と生体防御」、実習・演習系ユニットには「病理学総論実習」、「免疫学実習」、「症候学演習」がある。

例年に倣い、病変または疾病の原因、発生機序、組織・臓器の形態的变化および機能的障害、疾病の個体に与える影響、免疫の基礎、栄養学など、疾患理解の基礎となることが講義された。また、ヒトに対する理解を深めるため、受精、出生、成長、老化の時間的観点からヒトへのアプローチを試みる「ヒトの時間生物学」、人間を心理的、精神的側面から捉える「行動科学」、職業や社会生活ともかかわりの深い「中毒学」なども講義された。また、診断あるいは治療と関連して、放射線医学の基礎、薬物治療の基礎、和漢薬の基礎が講義された。「病理学総論実習」では、病変の基本的組織像、解剖例を使用して、臓器の肉眼や組織像を基礎とした病態について学んだ。「免疫学実習」では、免疫にかかわる仕組みを理解するために、免疫系細胞、抗体、またその応用手法である免疫学的検査などについての実習が行われた。症候学演習は、多くの教員の協力を得て、テュートリアル形式で長年実施されており、学生への浸透度も高い。

後期は8のユニットから構成される。講義系が4、実習系が3、演習系が1となっている。微生物学を中心とした講義科目と実習科目であり、講義系として「細菌・真菌と感染」、「ウイルスと感染」、「寄生虫と感染」、「感染症総論」、実習・演習系として「細菌学実習」、「ウイルス学実習」、「寄生虫学実習」、「感染・免疫テュートリアル」からなる。

微生物は生命現象そのものとのつながりが深く、多種多様な感染症の原因となる。現在、難病を含む

多くの疾患は、その原因が不明であり、遺伝子研究などの積極的なアプローチにも関わらず、原因の究明につながる成果は少ない。このため、疾患の原因としての環境要因、特に感染との関係が、最近見直されつつある。このような状況にあって、微生物学における教育では、単なる感染症の知識の詰め込みに留まらない高度な内容が求められる。

講義ユニットでは、病原体のもつ性質・特徴を理解し、病原体を通じた生命現象の理解に力を入れている。また、これらの病原体によって生じる感染症の病態、治療法、感染制御に関しても学ぶ。これらを理解することで、感染症に関する臨床医学への橋渡しとなるのみならず、原因不明の難病など、微生物が関係すると考えられる疾患の研究に対処するための基礎力を身につけることが本コースのひとつの目標となっている。実習ユニットでは、講義で学習した内容を、実習を通して実際に確認できるように配慮した。また、将来、臨床現場で使用される微生物関係の検査法を学ぶことで、検査の意義や限界を自ら考えることにも力を入れた。演習ユニットの「感染・免疫テュートリアル」は、講義と連動して、学生が主体的に感染・免疫に関連した事項を学習できるように、症例、エピソードメイキング論文、微生物に関する最近の話題など、学生が考えるための資料を提示した。これらを通して、感染・免疫に関する考えを自らまとめ、微生物に関して深く考える機会を与えることを目的とした。

4. コースの教育活動の点検・評価：前期の特色は基礎医学を基盤として、疾病や病変の基本的事項、行動、心理学の基本事項、放射線医学や薬物治療の基本を学ぶという点にある。今後臨床医学を学び理解していくにあたって、講義において基礎的知識を身につけるばかりでなく、実習を通じて医師としての相応しい言動、行動ができるように人格的な面においても学んでいくことが期待されている。

後期の学修内容について、生命科学や疾患の原因究明に関する研究教育としての重要性が増加している。また、その一方で、従来からの感染症に対処するための基礎的な教育も必要である。本コースでは、感染関連の知識・技能を集中的に学べることに關しては、概ね成果を挙げていると考える。

当該年度も講義における学生の出席状態は芳しくなく、遅刻、途中退席なども目立った。このような状態に対して、厳しく対処できる枠組みよりも、より魅力的な講義内容へのブラッシュアップ、ユニットで教育する内容の再検討、自己学習の時間・機会の提供など、新しい医学教育へ向けた取り組みが必

要な時期に差し掛かっていると考える。加えて、講義・実習の確実な学修を通じて自身に知を蓄積させることが、将来真摯な態度で患者を診ることにつながることを、学生自らが悟るような教育も重要なことと考える。現実には、試験をクリアすればよいと考える学生も多分に存在し、十分な学習をしないまま試験を迎える学生が目についた。上級学年での臨床科目への橋渡しとして、適切な学習態度を身につけるべく新しい工夫が必要であると認識する。

1. コース名：社会医学Ⅰ

2. コース責任者：岩橋公晴

3. コースの教育活動の概要：コース社会医学Ⅰは、社会医学のうち法医学に関係する領域からなる。授業（座学）としてはユニット「法医学」のみのコースであり、法医学演習、実習を含む。法医学に関する事項のうち損傷と中毒に関する部分は、コース臨床基礎医学のユニット「創傷学」、「中毒学」に含まれる。実習では東京都監察医務院見学と血液型実習を行い、演習では実際の解剖写真などをもとにした症例検討を行っている。

4. コースの教育活動の点検・評価：コース社会医学Ⅰは法医学のみの小さなコースであり、死体現象や焼死、溺死、窒息等、他のコース、ユニットに含めるのが難しい法医学独特の内容からなる。本学の統合型カリキュラムの中ではやや異質かもしれないが、学生にとっては、コンパクトにまとまったコースとして学習しやすいのではないと思われる。

1. コース名：社会医学Ⅱ

2. コース責任者：柳澤裕之

3. コースの教育活動の概要：コース社会医学Ⅱは、ユニット「衛生学公衆衛生学オリエンテーション」と「衛生学公衆衛生学」よりなる。講義内容は、オリエンテーション（1コマ）、概論（1コマ）、疫学・保健統計（4コマ）、環境衛生（4コマ）、社会福祉・社会保障制度・医療保障制度・医療経済・国民医療費（3コマ）、母子保健・学校保健・成人保健・高齢者保健（4コマ）、医療法規・倫理・安全（2コマ）、地域保健・国際保健（2コマ）である。

4. コースの教育活動の点検・評価：本コースの学習ガイド冊子を配布した上で、講義毎の配布資料で補足した。出席を毎回確認しモニタリングしたところ、開講当初は比較的好かったが、以後徐々に減少し、その後は10%前後であった。評価はCBTで行った。社会医学は、環境や社会と医学が密接な関係にあり、その関係を有機的に結び付ける学問であ

るため、学生各自にそのような観点から学修するように指導した。

1. コース名：研究室配属

2. コース責任者：近藤一博

3. コースの教育活動の概要：コース研究室配属は学生に、基礎医学や臨床医学の研究者のもとで終日、研究活動を実施してもらうことにより、医学研究の実施方法の基本を習得するとともにその醍醐味を味わってもらうことを目的としている。近年の、研究医の育成や、メディカルイノベーション発展への社会的要請に応えるために重要なコースであると考えている。学生は習得した基礎医学の知識すべてを動員し、これまで学んで来たことがどのように見出されてきたのか、どのように役立つかを知り、常識や既存の知識を疑う心も養う。

学生は実際の研究室に配属されるが、2010年度より研究室配属の期間を従来の4週間から6週間に延長した。また、2012年度からは3年次の最初に計5コマからなるEarly research exposure (ERE)を実施して、学生時代から研究を行うことの意義の説明や、各研究室の研究内容を紹介することで、課外に研究を希望する学生の受け入れを行う体制を整えた。2012年度は、EREのレポートの成績を研究室配属の配属希望先の選択に利用したが、2013年度より単純な抽選方式に戻した。

学生の配属希望が、楽な指導を行う教員に集中する傾向があるため、これを是正するために、2011年度は、配属先選択を講座・研究室単位としたが、学生の研究内容の選択の自由度を増すために、2012年度より、配属先の配属を研究テーマごととした。2013年度からは講座ごとの選択とテーマごとの選択を併用することとした。また、課外に研究を行っている学生への優遇措置も引き続き実施した。2015年度より、MD-PhDコースが開始され、研究室配属もMD-PhDコースの研究期間として利用することが可能となった。

4. コースの教育活動の点検・評価：研究室配属の成果については、配属先とよく相談し、可能であれば、成医会等で発表する。実験結果については、学生同士や教員とよくディスカッションを行い、最終的に、それまでの研究成果をレポートとしてまとめ、教員による指導、添削を経た後、提出する。

研究室配属実施後の学生の反応は良好で、学生会でのアンケート調査でも、学習効果があった実習であるとの評価を得た。2015年度より、MD-PhDコースが開始され、研究室配属もMD-PhDコースの研

究期間として利用することが可能となった。MD-PhD コースの一環として研究を行う可能性のある学生もいると思われるが、実際にこのような利用をしたかどうかは、学生の卒後の進路を見ないと判定できないので、この部分に関する評価には時間を要すると考える。

再試を抱えた学生が研究室配属に集中できないという問題があったが、この件に関しては、カリキュラムの改訂が行われ、2018年度から研究室配属の実施時期が再試験の終了後になった。これにより、再試の試験勉強期間が短くなってしまったことが、カリキュラム上の課題として挙げられている。

ここ数年間、研究室配属などへの基礎教育への資金提供が減額された影響もあり、研究室配属の募集人数が以前に比べて減少していた。対策として、各講座・研究室に加え、前年度に学生を募集してくれた教員に個人的に呼びかけを行った。この結果、2018年度からは募集人数も増加し、学生をより希望順位の高い教室に配属することができた。また、2019年度は学生の強い要望があったため、学生の能動的な研究活動に配慮し、当初受け入れ予定のない講座・研究室に対しても、打診し、配属を行った。

1. コース名：臨床医学 I

2. コース責任者：吉村道博

3. コースの教育活動の概要：コース臨床医学 I

は、'Introduction to Clinical Medicine (ICM)' と位置付けられる。これまでに学修した基礎医学に立脚して、医師として必要な臨床医学の知識と基本的臨床技能を身につけて4年生の後期から始まる Student Doctorとしての臨床実習が円滑かつ有意義に行えるように設定されたコースである。主に疾病に関する系統的な講義が行われ、各ユニットは単一の科に留まらず関連する複数の科で総合的に構成されている。さらに「病理学各論実習」にて病態の理解を深めることを目指した。また、実習・演習、「病理学各論実習」、「基本的臨床技能実習」を通して、臨床を実践する力やコミュニケーション技能を養い、社会における医学の位置づけや患者中心の職業的倫理観についても学んだ。到達目標として、1) 各ユニットを通じて臨床医学の全体像を把握する、2) 各ユニット間の関連(各臓器や疾患の関連)について理解する、3) 実習・演習、「病理学各論実習」、「基本的臨床技能実習」は目前に迫った臨床実習で直面する内容が多く含まれており、理解を深めて実践できるようにすることであった。学習上の注意点として、ICMの期間が短いことから、その内容は学修

に必須の項目が中心となる。積極的に全ての講義に出席すること。自らの理解度に合わせて参考書などを用いて学習することであった。実際の講義は、「オリエンテーション」、「外科学入門」、「形成再建医学」、「救急医学」、「皮膚」、「眼」、「耳鼻咽喉・口腔」、「運動器」、「精神医学」、「麻酔蘇生医学」、「循環器(ICM)」、「呼吸器(ICM)」、「消化管(ICM)」、「肝・胆・膵(ICM)」、「腎・泌尿器(ICM)」、「生殖・産婦人科(ICM)」、「血液・造血器(ICM)」、「内分泌・代謝・栄養(ICM)」、「リウマチ・膠原病(ICM)」、「神経(ICM)」、「小児医学(ICM)」、「画像診断学(ICM)」の各ユニットより構成され、滞りなく講義が実施された。実習として「病理学各論実習」、「基本的臨床技能実習」が行われた。本コースの評価は、教養試験OSCE、共用試験CBT、「基本的臨床技能実習」、「病理学各論実習」にて評価された。

4. コースの教育活動の点検・評価：本コースは、本学の教育改革一環として、4年生の後期から臨床実習が開始されるということで講義時間が短くなり、それによって教える内容もコンパクトにまとまりを持たせる必要性があった。それぞれの教員は効率のよい講義ができるように毎年試行錯誤を続けているように思われるが、一方で4年生の学生側からするとCBTが控えていることもあり、その勉強時間(自己学習)の確保の為に講義への出席率は例年同様、本年度もあまり芳しくなかったようだ。ただし、CBTの時期が8月に移動したことにより、学生に多少の余裕ができた印象はあった。今後、臨床の先生方がコンパクトに纏められた貴重な講義内容の有効活用の為には、臨床医学に初めて接する4年生に分かり易い講義のやり方(クリッカー等の利用、配布プリントの工夫など)もさらに検討していく必要があるかもしれない。また、講義をして頂く先生方は、全ての科を合わせると相当な人数に及ぶ。学生にとっては将来お世話になる先生方を短時間で一挙に知ることができる貴重なチャンスでもある。しかし一方で、各先生方の教え方は当然ながらそれぞれに特徴がある。先生方の個性や教え方がバラエティーに富むことは意味のある事と思われるが、初めて臨床医学を学ぶ学生の立場から考えると若干の戸惑いがあるかもしれない。さらに以前と大きく異なる点は、学生の学習環境が大きく変わってきていることである。種々のメディアが提供するインターネットサービスの広がりや医学学習教材を扱う企業の躍進が顕著であり、学生の勉学の方法が多岐に亘り、10年前とは一変している。つまり学び方が多様化している。いつの時代も講義が大事であること

は言うまでもないが、著しく変化する社会の変化にも目を配り、時代に即した臨床医学教育の方法を考える時期を迎えているのかもしれない。リモート講義や Web を使ったコミュニケーションの場の提供も必要であろう。臨床実習前の講義をどのように行うのか、今後も議論が続くと思われるが、基礎教育と臨床教育の橋渡しの時期をどう捉えるのかも含めて、引き続き幅広い議論が必要であろう。

1. コース名：臨床医学Ⅱ

2. コース責任者：岡本愛光

3. コースの教育活動の概要：本コースは、全科臨床実習と集合教育から成り立っている。全科臨床実習は、コース臨床医学Ⅰで修得した基礎的な臨床医学の知識ならびに基本的な臨床技能をもとに、全臨床科をローテートして、外来あるいは病棟における診療を経験する。集合教育では、臨床の現場を体験しつつ、そこで求められる臨床推論、基礎医学的思考を身に付けるとともに、その後の診療参加型臨床実習に必要な症例の診断と治療をケースカンファレンスの形で修得する。これらの実習を通して、将来医師として働く基盤を形成し、患者の持つ身体的問題のみならず、心理的・社会的問題も包括的に判断し、正しく適切な対応をする姿勢を体得する。共用試験 CBT、OSCE に合格し、student doctor の称号を得ることが、コース臨床医学Ⅱに移行するための必須条件としている。

臨床実習オリエンテーション終了後、2019年8月30日（金）に白衣授与式が行われ、学生代表による宣誓の後、竹森 重医学科長、井田博幸附属病院長から、実習の開始にあたっての心構えについての講話があった。学生を4～5人毎の約30グループに分け、グループ毎に、本院・分院各診療科で1～2週間の臨床実習を、行った。臨床実習約42～3週毎に1～2週間実施される集合教育では、ユニット「症候から病態へ」、「ケースカンファレンス」が演習として設けられており、「症候から病態へ」には基礎医学系の教員が参加し、臨床実習における基礎医学的知識の重要性の理解を促した。このほか、臨床系のテュートリアルや講義が行われ、臨床実習と交互に実施することによって、活きた知識を身に付けることを図った。

4. コースの教育活動の点検・評価：臨床実習の評価は、学生自身が記入し、インターネット上で閲覧できるe-ポートフォリオによって行った。各科の評価不合格価がF判定の場合は不合格となるが、D判定を受けた学生には、その時点で形成的評価と

して個人的にフィードバックを行い、その後の実習態度を改めることを促した。集合教育の開始にあたり、「症候から病態へ」ではクリッカーを用いた参加型の演習形態としたことから、すべての演習について事前のシミュレーションを行い、スライドの内容や質問を問うタイミングなどについて検証を行った。実施後には、学生の感想や要望を踏まえ、改善点を検討し、その後の演習に反映させた。

本コースの修了認定は、総合試験前期試験（2020年1月6日（月））、後期試験（2020年7月実施予定）の成績ならびに実習評価によって行った。実習でD評価のついた学生は、総合試験後期終了後、形成的評価としてのOSCEを行い、コース臨床医学Ⅲへの技能と心構えを確認した。

1. コース名：臨床医学Ⅲ

2. コース責任者：横尾 隆

3. コースの教育活動の概要：コース臨床医学Ⅲは、診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）であり、2016年度から開始された新たなコースである。本コースで行う診療参加型臨床実習とは、学生が診療チームに参加し、その一員として診療業務を分担し、実臨床を通して、医療現場で必要とされる知識・技能を自主的に学ぶ実習形態であり、活きた診療技能と医療者に相応しい態度を修得することを目的としている。また、多様な医療現場を経験することによって、個々の患者の診療のみならず、将来、医師として社会的貢献をする見識とプロフェッショナルリズムを育成する。実習は主として、第一線の医療を担う附属病院ならびに関連病院で行い、指導にあたる医師（研修医を含む）は診療業務のうち、医行為水準上許された役割を学生の能力に応じて分担させる。学生は教科書の知識だけでなく、実際の診療の中で求められる知識・技能を主体的に学習する態度が必須である。一方、本コースの選択科では学生の希望に応じ、海外での実習を可能としている。海外実習では、提携校、非提携校を問わず、TOFEL、IELTSで一定以上のスコアを取得する英語能力を前提として、国際交流センターが開催する認定審査を経ることを条件としている。

2019年7月4日（木）、8月30日（金）に、実習オリエンテーションを行い、実習の目標、ローテーション内容、実習の心構えなどにつき、理解を深めた。実習評価はe-ポートフォリオと各科の評価表に基づいて逐次行い、コース臨床医学Ⅱで評価不良だった学生ならびに本コースで不十分と評価された学生には、形成的評価を行った。

4. コースの教育活動の点検・評価：2019年12月23日（月）にクリニカルクラークシップ中間報告会を行い、進捗状況を確認した。ほぼ順調な経過であり、学生の感想も良好であったが、附属病院や教育病院での学習環境の不備などの指摘があった。教育病院の実習状態については、本年度からFace to Faceでの意見交換が可能になるように2019年11月25日（月）に拡大臨床実習教育委員会の後、

各施設の教育担当者と懇談会を開催し書面では伝わりにくい意見交換を十分時間をかけて行った。新型コロナウイルス蔓延にともなう措置として2020年4月以降の実習を見合わせる事が決定した。今後はより効率的な指導を行い、変則的になると思われるがポストクリニカルクラークシップOSCEを出れば行って評価をしたいと考えている。

看護学科

教学委員長 田中幸子

1. 各種委員会の構成

教学委員会：委員長 田中幸子，小谷野康子（1学年担当），中村美鈴，嶋澤順子（2年生担当），梶井文子（3年生担当），高橋 衣（4年生担当），

学生委員会：委員長 小谷野康子（学生部長），内田 満（保健担当），望月留加，山下真裕子，中島淑恵，高橋 衣（オブザーバー）

カリキュラム委員会：委員長 高橋 衣

臨地実習委員会：委員長 梶井文子

図書委員会：委員長 内田 満

国際交流委員会：委員長 内田 満

学修評価システム委員会：委員長 谷津裕子

大学自己点検・評価看護学科委員会：委員長 嶋澤順子

FD委員会：委員長 梶井文子

研究委員会：委員長 細坂泰子

看護学科防火・防災委員会：委員長 永野みどり
教育研究活動費，学生教育・実習費等運用委員会：委員長 中島淑恵

広報委員会：委員長 佐藤正美

就職・進路指導委員会：委員長 高橋 衣

地域連携看護学実践研究センター運営委員会：委員長 佐藤紀子

2. 入学式及びオリエンテーション

入学式は，2019年4月2日（火）に西新橋において医学科科と合同で行われ，新入生60名（うち男子1名，女子59名）が入学した。シンポジウムでは，「生涯発達とキャリア発達のために」というテーマで，福家貴氏（第20期生），浅川友祈子氏（第19期生），能登恵子氏（第17期生）の3名に仕事，進学，子育て等の経験に基づく話を聞き，生涯のキャリアデザインとそのための在学中の学修への取り組みについて講演をしてもらった。スタートアップ研修は，2019年4月16日（火）に西新橋校2号館講堂にて実施した。

3. 2019年度の看護学科在学生

1年生：60名，2年生：59名，3年生：61名，4年生：58名，合計238名（2019年4月1日）。

4. 2019年度カリキュラムの概要

2019年度新カリキュラムが，3年目を迎え，1年生と2年生，3年生が対象となった。1年次は必修科目である「医療基礎科目」4単位，「教養教育科目」から必修科目と選択必修科目の計16単位，「看護専門基礎科目」6単位，「看護専門科目」の16単位を履修した。2年次は，教養教育科目から必修科目と選択必修科目の計4単位，看護専門基礎科目から18単位，看護専門科目から24単位を履修した。また，シンガポール国立大学（NUS）と慈恵大学との間で締結されたMoAに基づき，2019年7月8日（月）～12日（金），NUSの2年生2名が第三病院，附属病院等において研修を行った。2020年3月9日（月）～13日（金）にNUSで予定されていた本学2年生2名の研修はCovid-19のため中止となった。3年次は，看護師教育課程と保健師教育課程に分かれ，本年度は，看護師課程を40名，保健師課程を21名が履修した。選択科目の国際看護実践では2020年3月3日（火）～11日（水），3年生15名が米国オレゴン州ポートランドの看護研修に参加する予定であったが，Covid-19のため中止となった。4年次は，前期は，各領域実習を履修し，後期は「看護総合演習Ⅳ」1単位と必修科目の「総合実習」のほか，看護専門科目の選択科目から2単位以上を履修した。総合実習〈共修実習コース〉では医学科の学生と医療倫理に関する合同カンファレンスを行った。〈国外実習コース〉では英国キングスコレッジロンドン（KCL）との選択実習生交換プログラムを実施した。2019年9月23日（月）～10月11日（金）に看護学科4年生2名がセントトーマス病院で2週間，2019年10月28日（月）～11月22日（金）にKCLの2年生2名が第三病院および附属病院で臨地実習を行った。看護師教育課程は130単位以上，保健師教育課程は136単位以上，卒業に必要な単位を修得した。

5. 看護への思いを新たにする式

2019年8月24日(土)に本学関係者、ご父母をお招きし、式典が行われた。式に先立ち学生は自分の「看護への思い」を表明し、続く式典で、北学科長から「看護への思いを新たにする式」の意義についてお話があり、2年生59名が「誓いの言葉」を述べた。3年生の学生会長から「ともし火」が継承された。

6. 学生、教学委員、学生委員会、カリキュラム委員合同FD・SD会議

2019年7月10日(水)に開催し、授業、施設改善等について意見交換を行った。課題提出日の重複については、次年度は重複しないよう調査を行い、事前に調整することとした。

7. Faculty Development

ヒヤリハット・インシデント・アクシデントシートおよびインシデント報告書の運用の仕方・報告の仕組み・項目など全体的な課題を抽出し、改善案を提案することを目的に、「実習におけるヒヤリハット場面の教材化の課題と方策の検討」を実施した。

8. 保健師・看護師国家試験

学生委員会を中心に国家試験対策講義を計5回実施した。第109回看護師国家試験は58名が合格(合格率100%)、第106回保健師国家試験は、20名が合格(合格率100%)した。

大学院医学研究科医学系専攻博士課程

研究科長 松 藤 千 弥

1956年、私立大学としては初の大学院医学研究科を設置して以来、医学に関する理論及び応用を教授研究し、その深奥を極めることによる文化の進展に寄与するとともに、専攻分野の研究指導者の養成の中心的役割を担ってきた。2007年4月より大学院の目的と理念を改め、臨床医学を中心に基礎医学および社会医学をも含めて優れた研究者養成を主眼とし、自立して研究活動を行うのに必要な高度の研究能力と、それに加えて医学の教育に求められる多様な指導力を養い、その基礎となる豊かな学識を深めることを目的とし、「最適の医療を提供するための臨床医学を支える研究者の育成と将来を担う医師の育成に携わる優れた指導者の養成」を理念とした。

1. 2019年度入学者選抜および入学生

1) 入学試験

第1次募集

出願期間：2018年8月27日(月)～9月15日(土)

試験日：2018年9月29日(土)に外国語(英語)、小論文、面接が行われた。

応募者19名・受験者18名・合格者18名・入学者16名

第2次募集

出願期間：2018年12月25日(火)～2019年1月12日(土)

試験日：2019年1月26日(土)に外国語(英語)、小論文、面接が行われた。

応募者25名・受験者25名・合格者25名・入学者24名

2) 入学生および派遣科

2019年度の入学者は40名(内、社会人14名)となった。また、大学院生の総数(1～4年)は163名となった。2019年度大学院1年生の氏名および派遣科、再派遣科は一覧の通りである。(表1)

3) 筑波大学を代表とする連携大学のひとつとして文部科学省が「がんプロフェッショナル事業「関東がん専門医療人養成拠点」」に加わり、がん研究者の人材養成を推進するため、2018年度より、(1)がんゲ

ノム医療人養成、(2)小児・AYA・希少がん専門医療人養成、(3)包括的ライフステージサポート医療人養成の3コースを設けており、2019年度は計17名の大学院生が新規受講登録をした。

2. 2019年度の主な行事・カリキュラム

1) 2019年度大学院の入学式は2019年4月2日(火)に行われ、その後約4ヶ月にわたり共通カリキュラム必修科目が実施され、選択科目も翌年2020年1月25日(土)まで実施された。共通カリキュラムのうち、社会人入学生に配慮し、授業を夕方以降や土曜日、e-learningシステムを利用して行った授業は以下の通りである。

- ・医学教育学
- ・医学研究法概論
- ・医の倫理
- ・医療統計学
- ・疫学・臨床研究
- ・臨床試験方法論
- ・脳・神経科学研究法概論
- ・英語論文執筆の実践的方法論
- ・がんプロ e-learning がんゲノム医療
- ・がんプロ e-learning 小児・AYA・希少がん
- ・がんプロ e-learning ライフステージがん
- ・認知症医療における多職種協働
- ・大学院生研究発表会

2) 選択カリキュラムは、2020年3月末日まで各派遣科および再派遣科において実施され、それぞれの研究施設において研究指導が行われた。

3) 2019年7月18日(木)に、学内講師による大学院特別講義を開催した。(表2)

4) 2019年7月18日(木)に、1年生を主とした大学院生、大学院委員会委員および共通カリキュラム担当教員が集まり、カリキュラム内容の意見交換の場である大学院特別セミナーを2号館講堂で開催した。

5) 大学院生研究発表会が2019年11月16日(土)と2019年12月21日(土)の計2回、5階講堂に

て開催された。第1回に16名、第2回に15名の計31名の研究発表が大学院生により行われ、活発な質疑応答が行われた。

6) 連携大学院生による研究発表会を2020年1月16日(木)に国立がん研究センター第1会議室にて開催し、5名の連携大学院生が研究発表を行った。

3. 2019年度におけるその他の主な審議・報告事項

1) リサーチ・アシスタント51名、ティーチング・アシスタント36名を採用承認した。

2) 業務目的の診療行為実施に伴い、附属病院リサーチ・レジデントとして65名と雇用契約を結んだ。

3) 研究科教員の任用

林 勝彦教授：授業細目「口腔科学」
(2019年5月1日付)

志賀 剛教授：授業細目「臨床薬理学」
(2019年7月1日付)

鈴木 正彦教授：授業細目「神経内科学」
(2020年1月1日付)

村上 秀友教授：授業細目「神経内科学」
(2020年3月1日付)

佐村 修教授：授業細目「産婦人科学」
(2020年3月1日付)

4) 大学雇用のポスト・ドクトラル・フェローに8名より新規申請があり、3名を採択した。継続申請1名も採択した。

5) 2019年度における学位取得者は大学院修了による34名、論文提出による48名の計82名であった。

6) 論文提出資格取得のための外国語試験を2回実施した。第1回(通算63回)試験は2019年5月25日(土)に行い、応募者41名、受験者41名、合格者34名であった。第2回(通算64回)試験は2019年10月26日(土)に行い、応募者38名、受験者38名、合格者30名であった。

7) 東京慈恵会医科大学学外共同研究費補助として、9件を採択した。(表3)

8) 東京慈恵会医科大学同窓会振興資金による海外派遣助成に14名(大学院生10名、助教4名)から申請があり、14名全員を同窓会に推薦した。(表4)

9) 東京慈恵会医科大学大学院研究助成金を29名に交付した。(表5)

10) 東京慈恵会医科大学医学研究科研究推進費について、2019年度は継続申請2件と新規申請に応募

のあった7件のうち2件、計4件を採択した。(表6)

11) 東京慈恵会医科大学萌芽の共同研究推進費について、2019年度は応募件数21件のうち5件を採択した。(表7)

12) 第5回東京慈恵会医科大学伊達会賞受賞者を2018年度学位取得者から3名選出した。(表8)

13) 日本学生支援機構第一種奨学金返還免除内定候補者選考に関して、在学生1名を採用時返還免除内定候補者として推薦することを承認した。

14) 学位申請の運用について、以下3点の変更を承認した。

(1) 学位論文審査の評価基準を改定し、A評価25~23点、B評価22~18点、C評価17点~15点、D評価14点以下とした。2019年12月21日申請分より、新基準の適用とする。

(2) 審査結果報告および総合最終評価を2020年度の学位取得者よりフィードバックすることとした。

(3) 短報を学位論文とする学位申請について、学位申請の手引きに「博士(医学)に関する学位論文審査施行細則」内該当項目を追加するとともに、「短報(Letter, Correspondence, Short report)は原則除外するが、大学院委員会で十分価値があると認めた場合には、受理することがある。」の表現の補足として、「十分価値がある」とは、論文の新規性・原著性に加え、学位論文作成の教育的意義(自立して研究活動を行うのに必要な高度の研究能力の涵養)を達成するために必要な質と量(概ね一般の原著論文1編分)の研究を行った上で論文の結論が導き出されているかという点を重視する旨を追記対応することとした。

15) 「研究生に関する規程」を改定し、第7条(修了・退学)在学期間延長の表記について、学位取得後も在学延長願の提出をもって1年を限度に在学延長が可能な旨を追記した。また、第6条(在学期間)に定める在学期間を超えた場合には前月末日を退学日とし、規定に追記した。

16) 看護学専攻博士課程の新設に伴い、医学系専攻博士課程を対象としている「論文提出資格取得のための外国語試験施行細則」と「英語試験の免除について(運用基準)」内の名称表記を修正した。

17) 日本学術振興会特別研究員(DC1, DC2)採用者について、報酬支給制限の一部緩和を受け、2020年度より週20時間未満の勤務遵守を条件にティーチング・アシスタント、リサーチ・アシスタント、リサーチ・レジデントとしての勤務を可能とし、報奨金制度は取り止めることとした。

18) 2016年10月に実施された大学基準協会認証評価以降、中央教育審議会「3ポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」に則り、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーの見直しを毎年行うこととしている。今年度は、看護学専攻と区別をつけるために「医学系専攻」の表記を追加し、2020年4月1日付で改定となる東京慈恵会医科大学大学院学則の表現に準じ、カリ

キュラムポリシー内、MD-PhDコースに関する説明とディプロマポリシー内、学位論文審査の流れに関する説明について改定した。

19) 大学院医学研究科医学系専攻博士課程公式サイトのリニューアルを行い、関係者専用ページとしてパスワードを付与したコンテンツ((1)執筆依頼等、(2)公開審査情報、(3)規則・各種マニュアル・リンク等)を追加した。

表1 1年生名簿

	氏名	派遣科	再派遣科	
1	渡辺 祐哉	包括がん医学		社会人
2	上井 康寛	呼吸器内科学	細菌学講座	
3	神岡 洋	消化器内科学	生化学講座	
4	大越 裕人	環境保健医学		
5	川本 浩徳	呼吸器内科学		
6	渡邊 直昭	呼吸器内科学	国立がん研究センター研究所細胞情報学分野	
7	河村 篤	消化器内科学		
8	松岡 諒	小児科学	国立成育医療研究センター研究所免疫アレルギー・感染研究部	
9	角皆 季樹	小児科学		
10	有村 聡士	循環器外科学		
11	笠原 佑太	産婦人科学		
12	伊藤 研	小児科学		
13	中條恵一郎	包括がん医学		社会人
14	川邊万佑子	腎臓内科学	分子疫学研究部	
15	高橋 弘武	循環器内科学		
16	山村 倫啓	産婦人科学	国立成育医療研究センター周産期病態研究部	
17	長谷川泰隆	分子疫学		社会人
18	伊藤 景紀	泌尿・生殖器科学	国立がん研究センター研究所細胞情報学分野	
19	都倉 桃子	分子腫瘍学		社会人
20	山田 理沙	精神医学		
21	柳垣 充	消化器外科学	遺伝子治療研究部	
22	今関 洋	包括がん医学		社会人
23	松井 基浩	分子疫学		社会人
24	立石 晶子	包括がん医学		社会人
25	丸本 裕和	腎臓内科学		
26	畑中彩恵子	腎臓内科学	日本医科大学大学院	
27	鈴木 詩織	包括がん医学		社会人
28	下田由季子	包括がん医学		社会人
29	菊地 亮	人体病理学・病理形態学		
30	成澤 知美	ライフスタイル医学		社会人
31	下山 雄也	消化器外科学	生化学講座	
32	松本 直人	腎臓内科学		

33	中野 薫	人体病理学・病理形態学		社会人
34	高橋 紘	糖尿病・内分泌内科学		
35	中條 圭介	リハビリテーション医学		
36	星野 理	循環器外科学		社会人
37	日向 佑樹	地域医療プライマリケア医学		社会人
38	中野 貴文	消化器外科学	九州大学別府病院外科	
39	山田 大輔	放射線医学		社会人
40	中西 智博	麻酔科学・侵襲防御学	細胞生理学講座	

表2 共通カリキュラム特別講義

科目	日付	時間	場所	講師
特別講義Ⅰ	7月18日	11時30分～13時00分	5階講堂	石渡 賢治 教授
特別講義Ⅱ	7月18日	14時00分～15時30分	5階講堂	金城 雄樹 教授
特別講義Ⅲ	7月18日	15時40分～17時10分	5階講堂	國原 孝 教授

表3 学外共同研究費補助金採択

	所属	研究代表者	研究課題	補助額
1	解剖学講座	岡部 正隆 教授	Tokyo Vertebrate Morphology Meeting (第9回)	40万円
2	分子生理学講座	竹森 重 教授	分子レベルに深化する筋肉研究の諸分野を細胞・組織・個体レベルの機能的統合で推進する	40万円
3	分子生物学講座	松藤 千弥 教授	ポリアミンと核酸の共進化(第18回)	40万円
4	熱帯医学講座	嘉糠 洋陸 教授	第6回東京ベクターエンカウンター「病原体媒介節足動物研究の最前線」	40万円
5	形成外科学講座	二ノ宮邦稔 教授	顔面骨の発生メカニズムの解明、構造解析による治療への応用	40万円
6	心臓外科学講座	國原 孝 教授	大動脈弁形成術の手術手技習得のための講演ならびにwetlabの開催	22.5万円
7	心臓外科学講座	坂東 興 教授	成人心臓血管外科手術における術中因子が早期及び遠隔期予後に及ぼす影響に関する前向きレジストリ研究	22.5万円
8	臨床検査医学講座	中田 浩二 教授	胃上部癌、食道胃接合部癌に対する術後QOL向上に寄与する胃切除術式、再建法に関する研究(当該研究に係る研究会議)	40万円
9	人間科学教室	三崎 和志 教授	生命倫理教育の質的向上の可能性の探求	15万円

表4 同窓会振興資金による海外派遣助成推薦者

	氏名	大学院生(派遣科名/再派遣科名)・助教(所属)	職名	国名	派遣先(研究機関, 学会名)	研究(発表)課題等
1	山村 倫啓	産婦人科学/国立成育医療研究センター周産期病態研究部	大学院1年	ドイツ	World Congress on Ultrasound in Obstetrics and Gynecology	Oligohydramnios with multiple cysts of bilateral fetal kidneys during pregnancy without evidence of pulmonary hypoplasia after birth: a case report
2	畑中彩恵子	腎臓内科学	大学院1年	アメリカ	American Society of Nephrology	慢性腎臓病患者における推定尿アンモニウム値の有用性について

3	浮地里佳子	糖尿病・内分泌内科学／神経科学研究部	大学院 2年	韓国	The 10th IBRO World Congress of Neuroscience	Clarifying the brain mechanism underlying the link between social hierarchy and glucose metabolism
4	横溝 陵	産婦人科学／国立成育医療研究センター研究所細胞医療研究部再生医療センター	大学院 2年	香港	The 9th Congress of ASPIRE (ASPIRE2019)	The impact on assisted reproductive technology in the patients who underwent uterine artery embolization
5	伊藤 晶彦	呼吸器内科学	大学院 2年	スペイン	ERS 2019	慢性閉塞性肺疾患 (COPD) 合併サルコペニア発症における Parkin の関与
6	寺内 稜	眼科学	大学院 2年	カナダ	ARVO Annual Meeting 2019	Minocycline suppresses microglial Ccr2 expression in inherited retinal degeneration
7	阿久津泰伴	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学／分子疫学研究部	大学院 3年	アメリカ	Brigham and Woman's Hospital Dept of Pathology (他研究室との勉強会・意見交換会)	消化管癌術後のビタミンD介入ランダム化比較試験の事後解析シリーズ
8	高田 直樹	消化器外科学／遺伝子治療研究部	大学院 3年	アメリカ	14th Annual Academic Surgical Congress	Combination Radiotherapy with NF- κ B inhibitor enhances antitumor effect of gallbladder cancer
9	市川 晶博	呼吸器内科学	大学院 4年	スペイン	ERS 2019	Chaperone-mediated autophagy-dependent chemoresistance in non-small cell lung cancer
10	杉山 佳史	地域医療プライマリケア医学	大学院 4年	カナダ	The North American Primary Care Research Group (NAP-CRG) the 2019 Annual Meeting	Association between alcohol consumption/alcohol use disorders and patient complexity in a primary care setting of Japan
11	榎 啓太郎	放射線医学講座	助教	スペイン	Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe (CIRSE)	Risk factors for urinary collecting system (UCS) injury of renal cryoablation
12	原 裕子	内視鏡医学講座	助教	アメリカ	Digestive Disease Week (DDW)	Long-term outcomes in the patients with pT1a-mm/T1b-sml esophageal squamous cell carcinoma preceding endoscopic resection
13	篠原 玄	心臓外科学講座	助教	ポルトガル	33rd EACTS Annual Meeting	Atrioventricular conduction pathway in hearts with right isomerism of the atrial appendages using non-destructive imaging method
14	村松 宏一	心臓外科学講座	助教	ポルトガル	33rd EACTS Annual Meeting	Evaluation of prolonged regional oxygen desaturation in acute type A aortic dissection repair

表5 研究助成金採択

学年	氏名	派遣科	再派遣科	研究課題	
1	2	里井 義尚	地域医療プライマリケア医学	研究1：都市部無床診療所における緊急紹介症例の特徴と傾向：ケースコントロール研究および後向きコホート研究 研究2：かかりつけ医の交代が患者に及ぼす影響：質的研究	
2	2	岩田 啓芳	地域医療プライマリケア医学	骨盤内炎症症候群に関する診断精度のメタアナリシス	
3	2	武井 淳	脳神経外科学	悪性腫瘍治療研究部	悪性脳腫瘍初代培養細胞および同細胞由来 glioma stem-like cells のネオアンチゲン探求に関する研究
4	2	小田川太一	熱帯医学・医動物学		vDNA を介した蚊とアルボウイルスの相互関係の解明
5	2	大村 有加	糖尿病・内分泌内科学	東京大学大学院医学系研究科社会予防疫学分野	日本人2型糖尿病患者の血糖改善を目的とした個別化食事指導介入効果の検証：無作為化試験
6	2	浮地里佳子	糖尿病・内分泌内科学	神経科学研究部	糖代謝発症に社会的階位が及ぼす影響の脳機構の解明
7	2	横溝 陵	産婦人科学	国立成育医療研究センター研究所細胞医療研究部再生医療センター	卵巣高異型度漿液性癌における microRNA-34a のバイオマーカーとしての有用性
8	2	伊藤 晶彦	呼吸器内科学		COPD 関連サルコペニアにおける Parkin の関与について
9	2	多田 剛志	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	京都大学医学研究科医学専攻感覚運動系外科学	温度応答性培養基材を用いた iPS 由来気道上皮細胞シートによる中耳再生医療の検討
10	2	松田 麻未	臨床検査医学		フラビウイルスの一回感染症ウイルスを用いた診断系の確立と利用
11	2	谷合 智彦	消化器外科学	遺伝子治療研究部	スフィンゴ脂質代謝抑制による抗癌剤耐性膀胱癌における新規治療法の検討
12	2	森田 康平	脳神経外科学		既存の脊椎内固定具の有害事象低減を図る新型デバイスの開発
13	2	今泉 佑太	消化器外科学	生化学講座	大腸がん幹細胞における Pim-1 遺伝子の機能解析
14	2	福島宗一郎	血管外科学	再生医学研究部	生体内組織形成術 (In Body Tissue Architecture: IBTA) 由来の生体吸収性ステントグラフトの安全性・有効性の検証
15	3	吉田絵理子	地域医療プライマリケア医学		日本の医学部・医科大学における LGBT 教育実践の現状調査
16	3	阿久津泰伴	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	分子疫学研究部	ビタミン D の消化管癌に対するプラセボ対照ランダム化比較試験におけるバイオマーカー探索
17	3	本澤 訓聖	糖尿病・内分泌内科学	群馬大学生体調節研究所	新しい α 細胞株の樹立
18	3	田中 祥朗	循環器内科学		虚血性心疾患・心不全における尿酸, キサンチンオキシダーゼ (XO: Xanthine Oxidase) の病態生理学的意義に関する研究

19	3	馬場 俊輔	小児科学	細胞生理学講座	左心疾患に伴う肺高血圧モデルラットによる肺高血圧の病態メカニズムの解明
20	3	河合 裕成	消化器外科学	国立国際医療研究センター肝炎・免疫研究センター	非炎症性肝線維化・発癌機構の機序解明
21	3	松谷 大輔	糖尿病・内分泌内科学		2型糖尿病モデルラットに対するSGLT2阻害薬の心不全重症化予防における12-LOXの関与の検討
22	3	川島 雅晴	腫瘍・血液学	東海大学総合医学研究所造血腫瘍分野	腫瘍と単球の直接接触阻害により、単球のPD-L1/2チェックポイント阻害を促す新規免疫治療の試み
23	3	平野 雅史	膠原病内科学		関節炎におけるprokineticin receptor 2の役割の検討
24	3	山下 祐	整形外科	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科	骨リモデリング制御機構の解明
25	3	岡部 宏文	麻酔科学・侵襲防御医学		二酸化炭素を用いた脊髄虚血に対する新たな治療戦略
26	3	金 義道	眼科学	東京都医学総合研究所視覚病態プロジェクト	アデノ随伴ウイルスベクターを用いた視神経再生と視機能回復
27	3	溝渕 圭	眼科学		次世代シークエンサーを用いた日本人における遺伝性網膜疾患の原因遺伝子検索
28	3	奥田 崇雄	麻酔科学・侵襲防御医学	神経科学研究部	慢性痛関連Functional Connectomeの解析
29	4	江崎 裕敬	臨床検査医学		肝臓インスリン抵抗性と虚血性心疾患の関連についての検討

表6 医学研究科研究推進費採択者

(新規申請)

	申請者	授業細目名	研究課題	年次計画	申請額／千円	採択額／千円
1	松藤 千弥	生化学・分子機能学	がん細胞増殖におけるアンチザイムの役割	1／2年	3,000	3,000
2	嘉穂 洋陸	熱帯医学・医動物学	寄生虫卵内服療法におけるヒト腸内細菌叢ダイナミクス	1／1年	3,000	3,000

(継続申請)

	申請者	授業細目名	研究課題	年次計画	申請額／千円	採択額／千円
1	柳澤 裕之	環境保健医学	必須微量元素亜鉛の不適切な摂取－亜鉛欠乏あるいは亜鉛過剰に起因する間質性腎症進展の機序	2／2年	3,000	3,000
2	岡野ジェイムス洋尚	再生医学	ヒトiNeuronを利用したALSの病態解析と核酸医薬による新規治療戦略の開発	2／2年	3,000	3,000

表7 萌芽的共同研究推進費採択者

研究組織			研究テーマ	助成金額 (千円)
研究代表者		共同研究先		
大塚 崇	外科学講座（呼吸器外科）	ウイルス学講座	胸部外科手術でのロボット手術を含む術式の外科医に対する影響の検討	2,000
炭山 和毅	内視鏡医学講座	細菌学講座 内科学講座（消化器・肝臓内科）	バイオフィルムを介した胆管ステント閉塞メカニズムの解明	2,000
山田 幸司	生化学講座	外科学講座（下部消化管外科） 基盤研究施設	型破り分泌を標的とした革新的な大腸がん治療戦略	2,000
常喜 達裕	内科学講座（総合診療内科）	環境保健医学講座 臨床検査医学講座 慈恵医大晴海トリートメントクリニック	人工知能（AI）を用いた喫食量自動算出システムの開発	1,777
朝比奈昭彦	皮膚科学講座	ウイルス学講座	屋外スポーツにおける紫外線が競技パフォーマンスに与える影響の検討	2,000

表8 第5回東京慈恵会医科大学伊達会賞受賞者

氏名	学位番号	学位取得日	論文名	雑誌名
横山 賢一	甲1087号	2018年11月28日	Pulmonary vein re-mapping after cryoballoon ablation for atrial fibrillation. (クライオバルーンによる心房細動カテテルアブレーション後の肺静脈内残存電位の評価)	Europace
川田 典靖	乙3234号	2018年12月26日	Redefinition of tricuspid valve structures for successful ring annuloplasty. (正確な三尖弁輪形成のための解剖学的研究)	Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery
齋藤那由多	甲1100号	2019年3月13日	Involvement of Lamin B1 reduction in accelerated cellular senescence during COPD pathogenesis. (慢性閉塞性肺疾患病態における細胞老化亢進へのLamin B1発現低下の役割)	Journal of Immunology

大学院医学研究科看護学専攻

専攻長 中村美鈴

1. 教育課程の目的

2019年度4月より、看護学専攻では、博士後期課程が開設され、これまでの修士課程は博士前期課程と名称変更された。博士前期課程における教育の目的は、大学院設置基準第3条に基づき、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力、又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことにより、高度に専門化した知識と技術を備えた看護の高度職業専門職を養成することである。分野には、成人看護学分野・がん看護学分野・看護管理学分野・母子健康看護学分野・地域連携保健学分野がある。また、クリティカルケア看護学領域・がん看護学領域・在宅看護学領域では、高度実践看護師教育課程(38単位)を開設し、専門看護師を育成している。

博士後期課程における教育の目的は、大学設置基準第4条および学校教育法施行令第23条に基づき、看護学および看護実践の発展に貢献できる優れた教育者、管理者、研究者の養成を主眼として、看護学分野における高度な研究能力と、人間中心の最善の看護を提供できる人材を教育する能力を養い、その基礎となる豊かな学識を深めることである。分野は実践開発看護学分野を置き、基盤創出看護学領域・先進治療看護学領域・予防推進看護学領域・地域包括看護学領域の4つの領域がある。

2. 2019年度入学生

博士前期課程の2019年度入学生は8名である。領域別入学生は、クリティカルケア看護学5名、看護管理学1名、老年看護学1名、在宅看護学1名である。

博士後期課程の2019年度入学生は3名である。領域別入学生は、先進治療看護学1名、予防推進看護学1名、地域包括看護学1名である。

在籍者数は、前期課程23名、後期課程3名を併せて、合計26名となった。

なお、前期課程学生3名が2019年9月21日に終了したため、それ以降の前期学生数は、20名となった。

3. 2019年度入学選抜および入学生

入学説明会を2019年7月2日(火)に実施し、参加者は29名であった。入学試験出願期間は2019年8月1日(水)~31日(金)であった。出願資格認定試験は2019年9月8日(日)に実施し、志願者は1名であり合格した。博士前期試験の入学試験は、2019年9月15日(日)に専門科目と外国語(英語)および面接を実施した。その結果、12名の応募があり、10名が合格した。後期課程の入学試験は、2019年9月8日(日)に専門科目と外国語(英語)および面接を実施した。その結果、6名の応募があり、3名が合格した。

4. 研究計画発表会および大学院(看護学専攻修士課程)研究助成

研究計画発表会を2020年1月18日(土)看護学専攻大講義室にて開催し、前期課程・後期課程の学生8名の研究発表があり活発な質疑が行われた。発表した学生は、「大学院(看護学専攻修士課程)研究助成」の2019年度公募に応募し、審議の結果、10名に交付を決定した。(表1)

5. 2019年度修了生

修士論文発表会を2020年2月22日(土)大学管理棟にて開催し、学生10名の研究発表があり活発な質疑が行われた。修士論文が2020年2月25日(火)に提出され、10名が修士(看護学)を取得した。(表2)

6. 看護学専攻課程変更認可申請

看護学専攻修士課程を博士課程に変更する申請が、2018年8月31日付にて、文部科学省より認可された。これにより、2019年4月1日より、博士後期課程を新設し、修士課程は博士前期課程に変更とされる。また、高度実践看護師教育課程(クリティカルケア看護)は、日本看護系大学協議会から2019年1月11日付にて認可された。その認可に伴い、成人看護学分野(急性・重症患者学)から、成人看護学分野(クリティカルケア看護学)とした。

7. 看護学専攻 Faculty Development 講演会

今回は、質的研究のエビデンスの活用のために、質的研究におけるシステマティックレビューの方法を学ぶことを目的に講演を開催テーマ「質的研究の

システマティックレビュー」について、講師は、今野理恵教授（兵庫医療大学）にて、2019年9月14日（土）13～16時に、管理棟大講義室で実施し、看護学科教員と大学院学生を含む参加者26名であった。

表1 研究助成採択者一覧

氏名	専攻分野	研究テーマ
横山 恵	地域連携保健学	初発脳卒中高齢患者の胃瘻造設を代理意思決定した家族に対する看護師の支援と葛藤
井上 貴晃	急性・重症患者看護学	クリティカルな状況にある人工呼吸器装着中の急性・重症患者が感じた Comfort の検討
酒井 武志	急性・重症患者看護学	急性・重症患者看護専門看護師における急激に健康破綻した患者家族の感情表出を支えるための臨床判断
塚田 容子	急性・重症患者看護学	急性重症患者に安心の感覚をもたらす看護実践の検討
星野 瑞穂	急性・重症患者看護学	救急初療における心肺蘇生処置場面において看護師が対峙するジレンマと看護実践－高齢患者を取り巻く状況に焦点をあてて－
青木 祥子	がん看護学	がん薬物療法による苦痛症状を抱えながら治療と就労継続を行うがん患者の体験
安藤 禎子	がん看護学	膀胱全摘術後の高齢尿路ストーマ保有者が体験するストーマセルフケア確立までの困難と対処
犬童千恵子	看護管理学	一般病棟で勤務する患者からの暴力を受けた経験のある看護師における職務ストレスと、ストレスに対する対処、ソーシャル・サポートとの関連
横山 利香	看護管理学	勤務帯リーダー役割の自己評価と職務エンパワメントの関連
土屋 沙織	母子健康看護学	在宅で医療的ケアを受ける重症心身障害児のきょうだいが体験するライフイベント選択のプロセス

表2 2019年度修了生

氏名	専攻分野	研究テーマ
横山 恵	地域連携保健学	脳神経外科病棟における初発脳卒中高齢患者の胃瘻造設をめぐる代理意思決定した家族員に対する看護師の支援と葛藤
井上 貴晃	急性・重症患者看護学	クリティカルな状況にある人工呼吸器装着中の急性・重症患者が感じた Comfort の特徴
塚田 容子	急性・重症患者看護学	看護師が捉える急性重症患者に安心の感覚をもたらす看護実践の構造
青木 祥子	がん看護学	症状を抱えながらがん薬物療法と就労を継続する再発進行がん患者の体験
安藤 禎子	がん看護学	免疫チェックポイント阻害薬による治療を受けるがん患者へ専門看護師・認定看護師が行う有害事象マネジメントの実践と難しさ
犬童千恵子	看護管理学	回腸導管造設術後の高齢者が体験する尿路ストーマのセルフケアにおける困難と対処
横山 利香	看護管理学	一般病棟で働く看護師が患者から受けた暴力の実態、およびそのストレス反応に対する影響因子の探索
土屋 沙織	母子健康看護学	病棟看護師の勤務帯リーダー役割自己評価と職務エンパワメントの関連